

鬼手形

耕之輔は阿紀を萩へ送り出してから一度仕事場に戻った。

先代から引き継いだ仕事場は広過ぎた。ガランとした仕事場は虚しい。先代の頃には常時五、六人はいた弟子が今は清水ひとりである。広過ぎて当然だった。

耕之輔はこれから行かなければならない屋敷の重い空気に気が滅入った。重いのは空気ではなく話の内容だった。

耕之輔が残りの土をビニールに包み込んでいると、入口に気配があった。

「お義兄さん、お出掛けになるんでしょ」

久美子だった。

「ああ、久美ちゃんそのために来てくれたんだろ」

「私も乗せてって貰っちゃいけないかしら。ううん、家じゃなく街までいいの」

「僕はいいよ。そうだな、こんな山あいの一軒家に女の子ひとりで留守番するのになにだな」

「怖くなんかないけど、ひとりじゃ退屈なもの」

久美子は屈託なかった。

耕之輔がこれから出掛けるのは妻の実家である。久美子は岳父の手紙を届けにやってきたのだ。手紙には久美子に留守番をさせて、来るようにと書かれていた。

用件は分かっている。明るい話などあるわけではない。

先代の亡くなる前から一部の識者の間では、浅谷窯は当代限りだろうとささやかれていた。それは跡を継ぐべき息子の作品が余りに萩焼の伝統を無視した作風だったからだ。中には伝統を無視しているのではない、元々稚拙なのだ、と評する者もいる。

先代が亡くなると商人を筆頭に潮がひくように入りが淋しくなった。その浅谷窯が今日までなんとかもって来たのは、先代の名前と妻の実家服部家の援助のお蔭なのだ。

服部家は江戸時代から藩の薬業に携わってきた素封家で、近隣では服部と聞くだけで一目置くところがあった。

「先刻、お姉さんから電話があったわ」

車が谷間を出る頃になって久美子が言った。

「何だって？」

「予定より二、三日延びそうなんですって」

「そう……」

困った夫婦というように久美子が笑った。

妻の初子は京都の茶の家元に箱書きを頼みに行っている。今日で三日目だった。相手の都合もあることなので、予定より延びることは今までにもよくあった。

服部家から呼び出しが掛かるのはいつも初子の留守中だった。耕之輔は出掛けに妻が頼んで行くのだと踏んでいる。

耕之輔にはこれから行って聞く岳父の言葉も義母の愚痴も分かっていた。

「これでは十一代続いてきた浅谷窯の名が泣く」

「もうそろそろ大人になって頂かなきゃあね」

「このままじゃ初子だって可哀想だよ」

「うちだってそう何時までも続かないよ」

そんなお説教とも激励ともつかぬ話の後で、

「しつかり頼むよ」

「銀行に何時もの物振り込んでおきましたから」と続いて終わるのである。

耕之輔には黙って耐えるしかない時間だった。彼には反論する実績がないし、理屈を言えば「そんなことを言っているから駄目なのだ」と二倍になって戻ってくるだけだ。

しかし、すべては俗世の俗な話である。

「スーパ―の前で降ろしてくださいさる？」

ライトバンは商店の並ぶ狭い街並みに入っていた。

「私はお宅で留守番しているんですからね。忘れないで」

「分かっている」

久美子がドアの音を大きくさせて降りていった。

耕之輔が服部家の長女初子と結婚したのは、今から思えば先代の最も充実した時期だった。仲に入る人があり、親同士が進めた縁談だった。初子は十一違う年の差を気にしたが、耕之輔に会うと一も二もなく承知した。両家にとって釣り合いの取れた又とない結婚と思われた。十年前のことである。

耕之輔は車を海岸の空き地に置いて歩くことにした。汚れたライトバンで乗り付けるのを岳父が嫌うからだ。

脇門の潜り戸を抜けると広い車寄せになっている。耕之輔は裏に回って勝手口から入った。

「まあ、こんな処から……」

お手伝いの老婆は慌ててみせたが、耕之輔は構わず靴を脱いだ。義母も婿が勝手口などからと何時も言うが、表から入れば入ったで「よく表玄関から来れたものだ」と言われるのがオチである。

軒の深い座敷には香が焚き込められていた。老婆がお茶を運んで下がると、かわりに義母が菓子を持って現われ、そのまま残って世間話を始める。その上で岳父の明信がおもむろに現われる。平生もそうなら気にもとめないだろうが、こんな時だけ他人行儀に仰々しく扱うのだ。大袈裟にすればそれだけ有り難味が増すとも思っているらしい。

耕之輔は苦い茶を苦々しくすすった。

「初子はまた京都ですって。何時帰るの？」

先から知ってるくせに、と耕之輔は思う。

「今日の予定でしたが二、三日延びるようです」

「今回は何のご用です？」

「家元の箱書きのことやら、お顧客先回りやら……」

「その箱書きだけど、お家元が難色を示してらっしゃるって本当？」

「そんなことは無いと思います」

「お家元もお父様の時代には直ぐに書いて下さったのにねえ」

「耕之輔君の茶碗じゃお家元だって考えるだろう」

明信の針を含んだ話が始まる。この辺りから話は核心に入っていく。

耕之輔は暫く考えてから口を開いた。

「お義父さんは和式のトイレと洋式便器とどっちが好きですか」

「私は世間話をしとるんじゃないぞ」

明信の声は湿った座敷に震えた。

「ですから作陶の話です。例えばの話、器用さで使い良い便器は出来るでしょうが、僕がこだわっているのは日本人にとって和式か洋式かといった本質的な問題なんです」

耕之輔としては例え話で噛み砕いて話すつもりだったが、正枝がにべもなく遮った。

「それは、どっちがよく売れるかで決まるんじゃない？」

話し合う気力が萎えるのはこういう時である。

「経済的な話をしているわけではありません」

「経済が立ち行かなくて何が出来るんだね。あんたは二言目には芸術だ、創造だというが、萩焼浅谷窯の坂戸耕之輔だということを忘れてるんじゃないのかい。お父上の息子でなく、浅谷窯の総領でなかったら、早い話が私たちだって初子をあんたの処にやったりはしないよ」

どう回り道しても結局は此処に落ち着くのである。

耕之輔とて萩焼の伝統を無視しているわけではない。

古萩の名品に鬼萩手と呼ばれるものがある。これを最初に見た時、耕之輔の軀を電撃が走った。それは茶碗というより筆洗に近い形だったが、荒々しく雄渾な造りで、身内に何かうごめいている感じがあった。その時は何がうごめいているのかわからなかったが、後で考えるとそれは作った人間の生命力だった。

「これだ！」

創造の芯を掴んだ気がした。耕之輔の目指すものはその時に決まったと言っている。明信たちのいう伝統より、もう一つ根元の伝統に依るべきだというのが耕之輔の考え方だ。しかし、その理解者は皆無に近い。彼が若手の選抜展に最初にそれを出品した時、余りの破調に周囲は狂気の沙汰と評した。その空気は今も変っていない。

老婆がやって来て正枝に電話だと告げた。

「誰から……？」

「お嬢さまが京都から……」

耕之輔は老婆を見たが、

「いえ、奥様にとおっしゃってます」

初子とは最初からしっくりしなかったわけではない。結婚当初は初子が耕之輔にのぼせていたこともあって、周囲も羨むおしどり夫婦に見えた。先代の存在も大きかったろう。経済的な心配もなかったし、苦労と言えば弟子たちの面倒くらいのもだったが、賑やか

好きの初子は自ら買って若者たちの面倒をよくみていた。

先代について京都や東京に行くことも多く、伝統窯の若奥様として顧客筋にも評判が良かった。

夫婦の間に翳りが見え始めたのは、先代が亡くなり、浅谷窯が下り坂を走り始めてからである。

資産家の長女に生まれ育って、苦労の経験を持たない初子は、逆境にはもろかった。徒長しすぎた枝は弾力に欠ける。歯車がはずれるとブレーキが効かず、ヒステリックに夫をなじった。

夫婦らしい感情を失って何年になるだろう。何を言っても頑なに自説を曲げようとしないうちに、妻はひたすら商売に徹していった。とりあえずは先代の残してくれた名で近隣の記念品などの注文を取ってかず物で目減りを防いでいたが、それも限界が見えてくると、京都に出掛けて家元にすぎる道を選んだ。当然、家を空けることも多くなる。

夫婦仲が決定的になったのは先代の代表的名品とされる井戸茶碗が、耕之輔に相談もなく、数寄者の手に流れていたことだった。

「この重大さが分からないのか」

「貴方こそ生活の大変さがまるで分かってないのよ」

そんな喧嘩のなかで初子は、耕之輔の経済的無能力をなじり、暗に服部家から運んだ金

額を口にした。

「京都であの子、苦勞しているらしいわ」

正枝が戻って来て溜息まじりに座った。

「苦勞してゐるって御家元の箱書きの方か」

「そちらもだけど、販売の方が……先代はあんなにお器用でいらっしやったのにね」

耕之輔は確かに器用ではない。世渡りも無器用だがそれに輪をかけて手指は器用でない。しかし、無器用だから茶碗が重いわけでもない。彼の狙いなのだ。一般に受け入れ難いのは事実だが、明信や正枝には人々に認められること、売れること、それも高く売れることが価値なのだ。耕之輔には反論する気も起こらなかった。

遠くで明るい声がして、久美子が帰って来た。

「あら、お義兄さんまだいらっしやったの？」

大きな腰を耕之輔の横にわざとドスンと据えると、早口に喋り始めた。

「あんな谷の一軒家で留守番しても退屈するだけだから帰って来ちやった。電話がいくつもあったけど黒板に書いておきましたから」

「どうもありがとう」

一緒に出て来たのだ、全ては芝居に決まっている。

「役に立たない子。それじゃ何のために留守番に行ったか分からないじゃないの」

正枝がいうのに、久美子は舌を出して甘えてみせ、一気かせいに如何に退屈な留守番であるかを喋り続ける。

「草むしりでもすればいいんですよ」

「お母さんアルバイト料くれる？」

耕之輔には久美子のもくろみは分かっている。耕之輔を両親から早く解放してやろうと帰って来たのだ。

「お義兄さん、裏の冷蔵庫の効きめ悪いわね。気を付けないと匂ってたわよ」

「そうですか」

耕之輔も明信たちの前では特に他人行儀になる。

「口の開いてた牛乳捨てたから、忘れずに買って帰って頂戴。姉さんも姉さんだわ、こういうこと主婦の責任でしょ。お腹でもこわしたらどうするんでしょう」

久美子が興奮気味なのは、阿紀の来訪と無関係ではなさそうだった。

阿紀は大きな揺れで目を覚ました。車は狭い農道に入ったらしい。暮れ果てて、月のない闇だった。

「あら、もう長門湯本に帰って来ましたの？」

「いえ、暗くなりましたが、寄るように言われている所がもう一つあるものですから」

「何処ですの？」

阿紀は余りの暗さに不安を覚えて訊き返した。

「香月泰男という画家を御存知でしょうか」

「香月先生のお家をお訪ねしますの？」

阿紀は思わず衿を合わせていた。

「いえ、集落を見て頂いておくようにと……久原という山裾の小さな集落です」

「安心しましたわ。私、寝てましたのね」

「ええ、とてもよく……」

「まあ、恥ずかしい。まさか口開けて寝てませんでしたでしょうね」

「いびきを少し……」

「えっ、本当……!？」

「ウソです」

清水の目がバックミラーの中で笑っている。やっと心を解いた顔だった。

車は川沿いに土手の道を走っているらしい。川の向こうに点々と灯が見える。

「あの灯の辺りです」

清水は橋のたもとで車を止めた。対岸の黒い山麓に小さな灯が見え隠れしている。窓を開けると夜の冷気が襟元を引き締めた。

「庭に豆の大木があつて、遺言でその根元に遺骨の一部が今も埋められているそうです」

「どういうことでしょう」

「家族をとっても愛された方だったのです」

「清水さんも香月先生にお会いになったの？」

「いえ、僕が来た時は亡くなられた後でした。香月先生も不幸な生い立ちだったようです」

「不幸な生い立ちって、家庭的に……？」

「お父さんがお母さんを離縁して自分も出奔なさったんだと聞いてます」

「香月先生も、つておっしゃいましたわね。すると坂戸先生も……？」

「それは、先生から聞いて下さい」

清水は車を発進させた。阿紀はその先を聞くのを諦めて、以前、夜の海に降る雪を描いた香月泰男の絵に深く感動した話をした。

「あの絵を見たとき、暗くて重いのは風土のせいかと思いましたが、それで香月先生は誰の手で育てられましたの？」

「お祖父さんが親代わりだったようです。お祖母さんも早くに亡くなられたそうで」

清水青年から香月泰男の幼時の話を聞きながら、阿紀は耕之輔の育ちを想い描いていた。あの重い暗さと母親のせつかんからだという顔の傷。恐らく表の傷痕より心の傷の方が深いに違いない。香月泰男が不幸な幼時体験からこの上なく家族を愛したという話は、そ

のまま耕之輔に当てはまるものかも知れない。少なくとも抱えた葛藤は似たものだろう。耕之輔が父親の愛用した上布にこだわる謎もその辺りにあるのかも知れない。

「坂戸先生は香月先生のこと、心から尊敬なさっているようね」

「香月先生は、先生のバックボーンです」

車は海岸に突き当たり、月のない海に沿って走った。

阿紀の目に、耕之輔の中を瞬間よぎる重い闇と、香月泰男の「雪の海」が重なって走った。

阿紀は思い切って訊いてみた。

「清水さん、先生のお顔の傷はお母さんのせつかんからだとおっしゃったわね。具体的にどういうことだったのでしょ」

「さあ。僕も人づてに聞いただけですから」

「お腹を痛めたお母様なのでしょ？」

「そうです」

「もちろん、故意にはなかったんでしょうけど」

「……それも先生から直接聞いて下さい」

「お訊きして失礼ではないかしら」

「気を許されれば話されると思います」

「そうね」

「今日、奥様はどちらにお出掛けでしたの？」

「それも気を許せば話されるでしょ」

「……？」

意味あり気な清水の口調にそれぞれの思案をはらんだ沈黙が車内を満たす。

「やはり貴女からは何も訊かない方がいいな」

「そうですね」

阿紀もそう思い始めていたところだった。

車は海岸から少し入った料理屋の前で止まった。

「耕之輔先生、先刻からお待ちかねですよ」

小母さんといった感じの女将が薄暗い廊下を先に立った。

奥の座敷に耕之輔はもう盃を傾けていた。

「お待たせ致しました」

阿紀が改めて数々の配慮に礼を言うのに、耕之輔はおしぼりでごしごし額をこすった。

「さあ、こちらにどうぞ」

正面から見る耕之輔は昼間の人懐っこい耕之輔だった。

「先に始めさせて貰ってました」

「どうぞどうぞ」

「貴女はこつちの方は……？」

「少しは頂きます」

「それは助かった。私はこれがないと話も出来ない駄目な男なのです。日本酒でいいですか」

「頂きます」

阿紀は素直に盃を受けながら、これは清水の言っていた、虜になるための儀式なのだ、と思う。

暫くは萩の印象など取り留めのない話が続いた。耕之輔は越後や上布の話を書きながら、阿紀は耕之輔の作陶の話を書きながら聞いた。

アルコールが入るにつれ耕之輔は確かに能弁になっていた。しかし、お互いに店の中に入りたいのに店の回りをぐるぐる回って入口を探しているのに似ていた。それが分かっているながら踏み込めないもどかしさに盃を傾けるペースだけが早くなっていく。

「先生のお作品拝見したかったですけど……」

「先生は止して下さい！」

耕之輔の吐き捨てる言い方に阿紀の頭は一瞬白くなった。気まずい一瞬だった。

「御免！ 僕ってどうしてこう駄目なんだ」

驚いて見上げると、懸命に立て直そうと肩を怒らせている憐れな男がそこにいた。

「どうしてこうなんだか。今だって、声を出す気なんか毛頭なかった。それなのに、あんな声を出して貴女を怖がらせてしまう。自分で自分の発声をコントロール出来ないというか、酒が入ると特にそうなんです。勘弁して下さい」

「どうぞ気になさらないで下さい」

清水青年の言う「何があるうともついて行く」という何かはこのことだったかと思われ。それは身内にたぎるエネルギーを制御しきれない獅子のようにも、瀕死の鳥のものがきのようにも思える。

耕之輔は手酌でたて続けにぐい呑を空けた。

「お疲れになっっているんですね。でもお軀は大切に頂きます」と

「そうですね」

耕之輔は素直にぐい呑を置いた。柀のはずれた素直さである。

阿紀は話題を変えようと、座った時から気になっていたことを訊いた。

「そういうのも萩焼ですか？」

「萩の土で焼けば何だって萩焼です。でもこれは下らん萩焼です」

「どう下らないんですの？」

「第一、こんなに重くては長く飲んでると腕が重くなる。口触りに抵抗があつて気持ちよ

く飲めない。それに……」

耕之輔は毒舌を吐きながら手渡して寄越した。持つと、思ったより指の間にずしりと来るものがあつた。裏返してみたが銘はない。

「あッ」

阿紀は思わず声に出し、耕之輔を見ていた。

「これ、先生の……」

「まあ、こんな無器用なものを作る作家は、他にいないでしょう」

「私にも陶器を見る目があるんですわ」

「見る目が無い証明かも知れない」

耕之輔も満更ではなさそうだ。

阿紀は耕之輔を喜ばせたことが嬉しかった。

「飲む時はいつも持ち歩いてるんです。器は何でもそうだけど、使わないと死んだも同然です」

阿紀は重いぐい呑を手の中で飽かず弄んだ。

それは器というより塊かたまりを感じさせる。節くれ立った塊は岩石を思わせる。

「遠くから拝見していたのと、手に持った感じとではまるで違いますわ」

「そ奴いの欠点は、酒が不味くなることです」

「一献頂戴してよろしいかしら」

「どうぞ。その代わり唇を切ってもしりませんよ」

「あんなこと……」

耕之輔に差された酒は岩の窪みで波立っている。

「先生の掌から頂いてるみたい」

「うれしいことを言ってくれるなあ」

さらにもう一杯なみなみと注がれた。

「満潮ですわね」

両掌に岩場の潮を見つめているうちに、阿紀の中に突然熱いものが込み上げてきた。わけのわからぬものが胸を突き、思わず見上げた瞳に涙がにじんだ。

「どうかしましたか？」

「御免なさい。……お恥ずかしいですわ」

阿紀は慌ててハンカチを探していた。

「私、おかしいんですの。時々こんな風になるんです」

「良かったらそ奴連れて帰ってやって下さい」

「でも、お気に入りでお使いになっっているんですよ」

「帰れば仕事場にゴロゴロしてる。分かってくれる人に使って貰えればこ奴も本望ですよ」

う」

「本当に甘えてよろしいのかしら」

「萩の七化けと言って、使えばもっと土の味が出ます。是非使ってやって下さい」

「では、お言葉に甘えて。うれしいわ」

「茶碗も一つ用意しました。旅の荷物になるから清水に別送させます」

「まあ、どうしましょう。私にはお返し出来るような物何ありませんわ」

「じゃ上布の雪晒しのお代、勉強してやって下さい」

ホテルへ帰ると部屋が変わっていた。

応接コーナーなどにもゆとりがあり、ひとりでは持て余す広さである。このホテルで一番の部屋だろう。耕之輔の差し金に違いなかった。

時計を見ると午前一時を回っている。阿紀は耕之輔から貰ったぐい呑を出して床の間に置いた。

改めて眺めながら、この小さな塊の中に耕之輔のすべてが含まれていると思う。苦惱、矛盾、葛藤など耕之輔のものがきが節くれ立った塊をなしている。しかし、それらを一つに凝結させているのは白い風のような寂しさだった。耕之輔がそこにそのまま居るようだ。

あの無残とも言える孤独は何とかなしてあげねばならない。それが出来るのは自分しかないし、自分に出来るのはそれだけだと阿紀は思う。

それにしても、どうして私のような者にあそこまで打ち明けて下さったのだろう。答えは分かっていたが、阿紀は自分で分からぬふりをして遠ざけた。阿紀には心を許してくれたことが誇らしく、嬉しかった。

タクシーがなくなるからと、追い出されるように表に出た時、送りに出た女将が冷やかに言うように言った。

「耕之輔先生が、人手を借りずにお帰りになるなんて何年ぶりでしょう」

「俺だって、元々はいい酒なんだ」

耕之輔が胸を張るようにして言った。

「それにしても、女嫌いの先生がいつの間にも宗旨変えなされたの？」

「今日だ」

阿紀を振り返った顔が如何にも少年だった。

車が走り出してから、しばらくは無言が続いた。

阿紀は思い切って口にした。

「お願いですから、軀を壊すような飲み方はなさらないで下さい」

言ってから恥ずかしくなり、軀を耕之輔にあずけた。

「うん」

伝わってきた体温は今も阿紀の中を切なく流れる。

恋。

確かにこれは恋なのだ。昨日までの憧れが、今はつきりと現実のものに変わっている。長い長い一日だったが、短か過ぎる一日でもあった。

疲れているのに芯が凝って寝られそうになかった。嬉しい筈なのに溜め息が続けざまに出る。

阿紀は気合いを入れるようにして立ち上がると、浴衣に着替えて、階下の大湯へ降りて行った。深夜の怖いほど静かなほの暗さの中で、ひとり身を剥いだ時、阿紀は正真裸の自分を見ていた。長いひとり暮らしに、絶えて久しい女の実感だった。

水音だけが鮮明に反響する。

耕之輔が話してくれた身の上は阿紀には背負い切れない重さだった。

「僕は父の子供ではないんです」

「どういうことでしょう」

「母の間違いから生まれたようです」

それを知ったのは小学校に入ってからだという。知って、母から受けた火傷のせつかんも何か了解出来たと耕之輔は言った。

「母には突然ヒステリックに自分を失うようなところがありました。子供心にも怖いと思つたものです。発作は突然に起こるんです。それが子供にはどんな時に起こるのか分から

なかった。今は分かります。大きく揺れていたんです。母にしてみれば、僕は自分が犯した間違いの証のわけだし、その相手の男の面影を僕は持つてるわけだから」

「お母さまはその方のこと、愛していらっしやったんでしょうか」

「少なくとも一時期は……出入りしていた商人だったようです」

「お会いになっていないのですね」

「会おうとも思わない。会ったら殺すかも知れない」

阿紀は黙ってうなずくしかなかった。

「だから僕は、父の血を受けていない。父のように器用でなくて当然なんだ」

耕之輔は吐き出すように言った。

「それを世間は先代の息子のくせに、という。十一代続いて来た浅谷窯の面汚しだ、恥さらしだという……」

「お父様は御存知だったんでしょうか？」

耕之輔の目が優しくなっていた。

「知ってました。血液型が違っていましたから。……でも、母のヒステリーから僕を守ってくれたのも父なんです。父は直接僕にそのことを言ったことは生涯一度もありません。母が亡くなってからです。父も苦しんだんだと思う。何しろ不義の子を後継者に育て上げなきゃならなかったのですから。……父に教わって土をいじり始めても、僕には何時もこ

のコンプレックスがあった。こんなことを続けても無駄ではないのか。才能が無い人間には、いくら頑張ってみても限界があるのでないか、無理な道をゴリ押ししているのではないか。そんな思いに苛まれてきたんです。それが違うと思え出したのはつい最近のことです。私は父の世界に近づくことを願って努力してきた。それが間違いないんだ、自分の作陶しか無いんだと、やっと気が付いたんです。無器用な人間には無器用な人間だけに出来る陶器作りがあるんだと」

「器用な方には出来ないという……」

「そうです。器用な人間には浅く滑るところがある。僕には上滑りしようがないんだ。僕という人間の全体重をかけて立ち向かうしかない。そこに活路もあるんだと……」

「手織りにも無器用だから出来る仕事ってあります」

阿紀は織りの打ち込みの話をした。

「手織りではどうしても織りの耳が揃いませぬ。打ち込みだつて機械のように揃いませぬ。まして私のような無器用者にはどう気をつけても、ざらつきが出てしまいます。腕の未熟さを反省もしました。でも途中から考え方を変えることにしました。この凹凸は機械織りでは出せないものだ。変えられても機械では同じ間隔にしか変えられない。横糸が耳でたるんでいても、この味は機械では出せないぞ、このざらつきは私だけのものだ、そう自分に言いかけさせるようになりました。確かに器用な人には機械織りに近づいて面白

が薄い場合もあります」

阿紀が懸命に喋るのを耕之輔は大きくうなずいて聞いていた。

「いい話を聞いた。父は父、僕は僕。自分の道を進むだけです」

「少なくとも、私は分かったつもりですけど」

「そう貴女は僕を認めてくれた第一号だ」

「じゃ、第一号の認定書を下さい」

阿紀も調子に乗って言った。

「うれしいなあ。こんな楽しい酒が飲めるなんて。うれしいなあ」

耕之輔も急に酔いが回ったのと同じ言葉を繰り返した。

秘密をはらんだ出生から、性格的にも世間的にもゆずぶられてきた男が、やっと見付け出した自分自身の道に阿紀は拍手を送りたいと思う。

部屋に戻り、床に入っても目は冴え渡った。

あの翳りを含めて耕之輔を真から理解できるのは世界中に自分しかいない、あの暗さから耕之輔を救えるのもやはり自分だけだ、と思ってしまう。

そこまで来て、阿紀は初めて耕之輔の妻の存在に気がついた。

そう言えば、耕之輔の口から妻の話は全く出なかった。

目を覚ますと、もう陽は高かった。

庭に池があるのか、天井に波紋が明るく揺れていた。

「あら恥ずかしい」

ひとり居の癖で思わず声に出して起き上がると、衣桁の紬が「駄目ですよ」とにらんでいた。振り返ると鬼手のぐい呑が床の間に鎮座して、昨夜が夢でなかったことを語っている。

手早く身支度をしながら、耕之輔に会えた喜びと、別れた寂しさが交錯した。朝食を断り着物を畳んでいると電話が鳴った。フロントからで耕之輔がロビーで待っているという。昨夜、別れの挨拶は済ませていた。見送りを固辞しておきながら、何処かで期待していたことだった。急に化粧ののりが気にかかる。

ロビーに降りて行くと耕之輔は背中を見せて陳列ケースを覗いていた。腰を曲げても巨体は巨体だ。

「約束が違いますわ」

つい甘えた言い方になる。

「清水の奴、変なんです。今朝起きたら車を洗っていて、山口までお送りすべきだと言っています」

「清水さんのせいになさいますのね」

阿紀がすねてみせると、

「本当です。事実ですよ」

耕之輔は生真面目に応じた。

「これが先代の作です」

「着いた夜拝見しましたわ」

阿紀は耕之輔を窺いながら言った。

「見事な茶碗だ。身内だがくさすわけにはいかない」

耕之輔は阿紀の荷物を持って歩き出していた。

表の車はまだ濡れていた。

「長い間、あれと格闘してきたんです。勝ち目のない格闘を」

県道に出ると耕之輔が言った。

「心から尊敬していらつしやるのね」

「人間的にも陶芸家としても最高だったと思ってます」

山口への道はかなりの山越えだった。

阿紀はいつか耕之輔の中の父親像を推し量っていた。

「生意気なこと申し上げてよろしいかしら」

「何でしょう」

「私には父の印象が薄いのです。父との間に何時も母が介在していて、父は何時も母の向

こうに居たような気がします。父は夕方帰って来る人、働いて私たち一家を支えてくれる人。そんな印象しなくて、今も仏壇に向かっけていて、母のように切実なものがありまさんの。早くに亡くなつたせいかも知れませんが、昨夜、お話を伺いながら、つくづく羨ましく思いました。たとえ難しい問題があつたとしても、子供の中にそこまで食い込んでいるお父さまは世間にもそうは居ないのではないのでしょうか」

耕之輔は黙ってハンドルを握っていたが、

「食い込んでいると言えばそうかも知れないけど」

と、芯からはふに落ちないらしかった。

「お子様はいらっしゃいませんのね」

「僕の子供ですか？」

耕之輔が大きくハンドルを切った。かなりの急勾配で車も耕之輔以上にあえいでいる。

谷を隔てた山肌は整然と植林された杉木立で、パッチワークを見るようだった。

「この世に生まれて来るといふのもネ……」

耕之輔はそこまで言いかけてやめた。阿紀が思わず振り向いたせいしなかった。助手席から見る耕之輔は左頬で如何にも端正な偉丈夫だ。それが却って見えない右頬の痛みを伝えた。

この人の傷は想像以上に深いのだ。

阿紀は改めて男の顔を見た。端正な顔に初めて亀裂が見えてくる。

「この先に見晴らしの利くところがあります。少し休んで行きましょう」

しかし、そこはなかなかやって来なかった。思い出したように対向車が通過して行く以外何も見えない登り道に長い無言が続いた。

「僕は、貴女のが好きになつてしまった」

直截な言い方だった。

「困りますか」

阿紀は緊張から声が出なかった。

「昨夜はうれしくて寝られなかった」

私も、と言おうとして声にならない。

「とんでもない思い違いなら許して下さい」

阿紀はうつむいたまま大きくかぶりを振っていた。

車はやつと通れる狭い林道に入つて行った。

轍の凹凸に大きく揺られながら、阿紀は耕之輔に抱きつきたい衝動を覚えていた。ハンドルを把る耕之輔の掌は人並みはずれて大きい。

道は小さな日溜まりで行き止まりになつていた。

止まっても、少しの間、耕之輔はハンドルをはなさなかった。

耕之輔の息遣いを計っている自分を阿紀は、はしたない女だと思う。そう思いながら扉を押して外に出られなかった。

「大した見晴らしでもないけど」

耕之輔が先に扉を押した。見晴らしが利くと言っても杉の幹を通しての眺望だった。

高曇りの空に鷹が一羽舞っている。

「空気がおいしいわ」

頭が空っぽで平凡な言葉しか浮かんでこない。鼻孔に秋が痛かった。それを言おうとして深呼吸した時、後ろから肩を持たれた。そのたくましい掌が震えていた。気が付くと阿紀は自ら耕之輔の胸に顔を埋めていた。止めどなく涙が流れた。

引き寄せられ唇を合わせても涙は止まらなかった。その涙を耕之輔はハンカチで拭いてくれた。

「僕には妻がいる。でもずっと前から夫婦ではないんです。いずれくわしく話すけど……」

「いいの、何もおっしゃらないで」

それだけ言うのがやっとだった。耕之輔は一度離れると車から缶コーヒーを持って来て阿紀に持たせた。

「卑怯だったかな」

「どうして？」

「運転しながらずっと考えていた」

「悪い方だわ」

阿紀の方から身を寄せて行った。今度はしっかりと固く抱き締められた。長い長い接吻だった。

「さてどうやって車を戻そう」

Uターンにかなりの時間が掛かった。二人の最初の共同作業だった。

「バック、バック、ストップ」

「もう大丈夫、乗って下さい」

発進して間もなく耕之輔が思わず吹き出した。

「何がおかしいんです？」

「何でこう馬鹿なんだろう」

「何がですか？」

「バックで出れば何でもなかったんだ」

今度は阿紀が笑う番だった。

峠を越すと視界の広い爽快な下りだった。

「僕は貴女のことを何も知らない」

耕之輔がハンドルを把つたまま突然気が付いたように言った。

「でも判って下さいました」

「いや、何も判っていない。自分のことばかり喋って、貴女から何も聞いてない」

「女はお話を聞きたがるものですよ」

「僕がお喋りだからいけないんだ。もう黙ります。今度は貴女が話して下さい」

「……私なんてただ平凡に過ごしてきただけです」

阿紀にも、話す相手に飢えてきた耕之輔が実感できた。この人は、その分私に一気に吐き出している。世界は自分の為にある、と歌ったのは誰だったか。秋なのに春だった。

「小千谷では毎日どうしているんです？　どんな部屋に寝起きしてるんです？　どんな日課なんですか？」

「そんなに一度に訊かれても……」

「いけない。また喋ってる」

耕之輔は沈黙したが、黙って座っているだけで阿紀は幸せだった。充実しているとはこういう時を言うのだろうか。

「越後には何時帰るの？」

「予定だと八日の夕方に」

「電話していいね」

「私の方からします……離れには電話ありませんの」

忘れかけていた耕之輔の妻の存在が突然浮んできた。

耕之輔は妻ではない、と言ったが、それで済むことではない。そう言えば、あの義理の妹という娘の存在も気にかかる。雪の中で遠い耕之輔のことをあれこれ思い煩うには越後の冬は長すぎる。

「帰ったら直ぐに電話つけて貰います」

「そうして下さい」

近づく標識が山口市に入ったことを知らせていた。

耕之輔は県立美術館の駐車場に車を入れた。阿紀に香月泰男の特別展示を見せたいらしい。

玄関を入ると庭をバックにしたロビーに、萩焼の大壺が五つほど並んでいた。

先代耕之輔の作品は阿紀にも直ぐにそれと知れた。

「よく判ったね」

耕之輔は大きな手でその大壺を撫でた。

「父も、きつと喜んでくれていると思う」

ぼつりと言った。阿紀は涙もろくなっている自分に驚きながら、彼の背に軀を寄せて壺に触れてみた。見た目よりは遥かに冷たく硬かった。

耕之輔は香月泰男の特別室で、小さな絵を前にして動かなかった。母親が子供に手を差し伸べている素朴な絵だった。子供も母親に手を差し上げている。

「たまらんなあ」

耕之輔が独りごちた。

「……」

うなずいたものの、阿紀は耕之輔の真意を計りかねていた。出生の秘密に悩み、こんな苦しみは自分ひとりで沢山だと、子供を持つことを拒否してきたという耕之輔である。母のヒステリーに悩まされ、顔に大きな傷を残された息子でもある。その彼がこの絵に何を見ているのだろう。

耕之輔は特別室を出ると阿紀を裏庭へ案内した。

「あの母子像を見ていると何時もたまらない気持ちになるんです。母親の手と子供の手が求め合っているあれ、あの呼吸が何ともたまらない」

「香月先生も幼い頃に御両親との縁が薄いお方だったとか……」

「それだけに御家族を、それは大切になさった方です。父にも僕にも憧れの家庭でした」

「お子さまがいらつしやれば、きっと可愛がられるでしょうね」

「僕のことですか。……鼻持ちならない親父でしょう」

阿紀は耕之輔の子供を欲しいと思った。特定の人の子供を欲しいと思う、かつて無かつ

た衝動に阿紀は慌てて身繕いを正す。

耕之輔が腕時計を見て立ち上がった。

「お昼を食べて駅に出ましょう。小郡へは直ぐです」

耕之輔の大きな歩き方に阿紀は小走りに急いだ。

耕之輔が案内したのは、門柱一つにも歴史を感じさせる旧家らしい料亭だった。洋風の応接間を改造したカウンターに座ると耕之輔は又時計を見た。阿紀も残りの時間を計っている。残り一時間を切っていた。

「……疲れた？」

「いいえ」

ふたりは黙って箸を使った。

耕之輔は式台の下で阿紀の掌を掴んで来た。鬼のような掌を小さな掌が握り返した。

「何から何までお世話になってしまって……。本当にありがとうございます」

車に引き返す間も耕之輔は怒ったように無口だった。

小郡駅までの道は近すぎる。

「私に見送らせて下さいね。見送られるのは嫌」

耕之輔は唇を噛むように前方を見詰めていたが、駅前に着くと、怒ったように言った。

「じゃ見送らない。勝手にお帰りなさい」

「……子供みたい」

「怒ってなんかいないよ」

「じゃ、何か言って」

「ありがとう……うれしかったよ」

意外な言葉に阿紀は振り返ったが、涙で耕之輔の顔は見えなかった。

「お気をつけて帰って下さい」

「君こそ……」

阿紀は思い切って降り立つと、トランクから荷物を出して蓋を落した。それを待っていたように車は急発進した。

「ほんとにヤンチャなんだから……」

阿紀はひとり、ロータリーの向こうを走り去る車をいつまでも見送った。